なるほど、なぁ　USA　（その一）

アメリカ、ナショナル・パークの歩き方

日本の 26 倍という膨大な広さ、人口は 2.3 倍、人種は、インディアンといわれるネイティブ・アメリカ人、ヨーロッパのありとあらゆる国を母国とする西洋人、アフリカから渡ってきた人たち、そして、メキシコ人、アジア人と、人口の坩堝と言っても過言ではないような国、それがアメリカです。そのアメリカに私は、新しい仕事を求めてわたりました。そのとき、私は還暦の年でした。日本の大手化学メーカーといわれる会社を早期定年退職した後、すこし冷却期間を経て、もう一度、製造の現場で働きたいという気持ちから、日本の自動車部品メーカーの子会社である会社に、現地採用ということで勤務することになりました。ご存知のようにアメリカで働くには、ビザが必要です。特に、親会社からの派遣社員であれば､アメリカへの経済投資の一役として E-visa が容易に取得できるのですが、現地採用で就職する場合には、アメリカにとってメリットになるような技能を持っていることが前提となる H-visa をとる必要があるのですが、昨今は、この H-visa の取得が、不景気も影響してとても難しい状況です。そんな中で､幸運にも H-1b というビザが取得でき、これをもってアメリカで働くことが可能となったわけです。アメリカで働こうというきっかけは、常々、グローバル化の進む現代のビジネス社会のなかで、特に若者は日本から飛び出し、世界のビジネス社会で、自分の技量で仕事を探すことが必要ではないかとの持論がありましたので、それなら、実際の仕事の現場はどうなっているのか、それを自分で経験して、若い人たちへの指針が示すことができればとの思いがあったからです。このことについては、厳しい現実を目の当たりにし、安易に、アメリカに行けば何とかなるとの甘い考えは通用しないということを痛切に感じましたので、また機会を見付けて紹介してゆきたいと考えています。

アメリカでは、四年半の勤務でした。仕事では、そんな思いを抱いて帰ってきましたが、アメリカに滞在している間、仕事とは離れて、とても基調な体験をしてきましたので、これが、これからの若い人たち、あるいは、日本の人たちの価値観に少しでも参考になればということでアメリカ人の合理的な考え方の一旦を紹介したいと思います。

私がアメリカに渡ったのは、2005 年の 1 月でした。この年は、丁度、「ルイスとクラークの探検隊」が、アメリカ西部を第三代大統領トーマス・ジェファーソンの命令により、ミズーリ川を遡り、ロッキー山脈を乗り越え、オレゴン川をくだり、太平洋まで踏破、そして、その間に、幾多のインディアンとめぐり合い、新しいアメリカの建国の基盤を築いて、セントルイスに無事帰還した年から、丁度、200 年、アメリカ中でその記念行事が進められていた年でした。たまたま、立ち寄った本屋にこの偉業を紹介した本が何冊も並べられており、それまで、その存在すら知らなかった私は、一体、この「ルイスとクラークの探検」

とは何なのだろう、ということで、手ごろな二冊の本を手に入れました。そのときは、すでに、仕事でたまに使う英語のため、学生時代の単語も随分忘れていましたので、その単語を思い出す意味で、なにか適当な本を探していたときでした。最初は、そんなつもりで、単語を調べながら、本を読んでしたのですが、読んでいるうちにこれが、アメリカの建国、とりわけ、ルイジアナ買収後の西洋人とインディアンとの出会いという、アメリカの歴史のなかでは、きわめて重要な出来事、つまり、隠れたアメリカの歴史そのものであるということが分かってきました。ルイジアナ買収というのは、アメリカが、フランスのナポレオンから、ミシシッピー川以西を買収し、その統治権を獲得した史実です。これにより、アメリカは世界の歴史の舞台に踊り出ることになったわけですが、そんな出来事をそれまで、微塵だに知りませんでした。この「ルイスとクラークの探検」は、アメリカの知識人たちの間では、「もし、自分が歴史上の史実のなかで、その現場に立ち会いたいという事件はなにか」というアンケートに対し、もっともアメリカ人たちがかかわりたいと考えている出来事とのことです。

そんな出来事の存在をしり、また、その舞台が自分の滞在していたネブラスカから始まるということを知り、この物語に出てくる様々な場所を尋ねることが、私の土・日の余暇つぶしになりました。この旅は、実際には、セント・ルイスから始まるのですが、探検の目的は、まだ、アメリカに十分な情報がなく、未開の地とされていた、カンザス・シティからミズーリ川を遡り、ロッキーを越えて、大西洋に流れ込む川を発見すること、そして、その間に住んでいるインディアン達に、その土地の統治者が、偉大なる父、「アメリカ合衆国」であることを認めさせることだったのです。これを若い二人のキャプテンが 50 名足らずの隊員達を引き連れ、悪戦苦闘のすえ、大偉業を成し遂げたというものです。その苦難を知るためには、彼らが辿って道を、自分の足で確かめこと。そして、その距離が日帰りから、泊りがけで遠出するようになったわけです。

こうして、ドライブをしていると、自分の滞在していたネブラスカは、サンド・ヒルの大地なのですが、サウス・ダコタまで足を伸ばすと、そこには地球の上の月面といわれるバッド・ランド、四人の大統領の顔が岩山に刻み込まれたラシュウモア、まだ、全容が解明されていないというアメリカでも有数の洞穴、ウィンド・ケイブ、ジュエリー・ケイブなどのナショナルパークなどがあり、自然がつくった造詣の異様さとその迫力にただ驚くばかり。こうして、私は、アメリカにいる間に少しでも沢山の自然を体験しよう、アメリカの広大な自然を目の当たりに見て回ろうということになりました。

ネブラスカはアメリカのへそ

アメリカを走り回ろうという私にとって、幸運であっのは、ネブラスカがアメリカのど

真ん中にあったということです。ただ、アメリカのど真ん中とは言え、日本からの直行便はありませんから、飛行機で行く場合には、ミネソタのミネアポリスか、イリノイのシカゴまで、あるいは、ときには、デトロイト経由で、州都のリンカーンまで入るということになります。フライトの時間は 12～13 時間ですが、トランジットまで入れると 15 時間程度になり、日本からはもっとも遠いアメリカという田舎の町です。東西の海岸までは、およそ、2,000 マイル、そして、カナダとの国境、あるいは、メキシコ湾までは、いずれも、1,500 マイルと、まさしく、アメリカ大陸の中心にあります。海岸から一番離れているということで、近くのオマハという都市には、臨時の国防府があり、いざというときには大統領がここに避難して、戦闘の指揮をとる場所になっているという噂があります。また、カンザスとの州境には、アメリカの地理学上の中心地があり、ここは畑のど真ん中ですが、モニュメントがあり、アメリカの国旗がいつも掲げられています。政府が管理してい土地ですが、ここで結婚式をする人のために六畳間くらいの小さな教会もあります。なかなか粋なとりなしです。先にも書きましたが、ネブラスカは、サンド・ヒルの地、ロッキー山脈の東に広がる大草原の地ですが、土地がやせていて、また、起伏も少しあり、大型機械を利用するアメリカ式の農場にはあまり適していません。が、トウモロコシの栽培が盛んで、これにちなんで、ネブラスカの人のことを「トウモロコシを剥く人たち」という意味のコーン・ハスカーという愛称で呼びます。ネブラスカのフットボールチームも、バレーボールのチームも、何でもかんでもコーン・ハスカーで通ります。

そして、ネブラスカは太古の昔は、この辺りに恐竜が住んでいたということで、いたるところにその化石がでます。ネブラスカ大學には、この界隈で発見された恐竜の化石が展示されている、アメリカでも有名な恐竜博物館があります。玄関の前にはマンモスの像が立っており、訪れるひとにその大きさを誇示しています。もちろんこの博物館に展示されているものは、学術的にはとても貴重なもので、アメリカ中から研究者が見学にきます。この博物館に入ってびっくりするのは、この恐竜の化石の豊富さもさることながら、そのほかの動物の剥製の展示物、平原の動物、森の動物、そして、海の動物と、とにかく、その数の多さにはびっくりします。あるとき、この博物館を訪ねましたが、なかなか人気のある博物館でかなりのひとでにぎわっていましたが、そんな訪問者のなかに、スーパーのビニール袋に、自分のうちの畑から出たという骨を沢山入れて持参している家族がいました。そして、お父さんがその骨を博物館の床に広げて、博物館の説明員の人と、一つ一つ検分しているのです。係官は、いろいろな質問に丁寧に答えていました。そして、それが、紛れもなく恐竜の化石だと説明していました。横では小さな子供が、まるで、自分のうちの畑から宝物がでたのだと自慢げに、そして、びっくりしたように大きな目をくりくりさせて、お父さんを尊敬するようなまなざしで見ているのです。この姿を見ていて、この子は将来きっと、こうした恐竜の骨の発掘に興味をもっていくのだろうなぁと、感心してみていました。にやにや笑っていたお母さんのほうは、どんな思いでこの光景をみていたの

でしょうか。ネブラスカでは、こんなふうに、自分の畑からマンモスの化石が出てきたなどというのは、少しも珍しいことではないようです。近くには、マンモスの化石通りなどという名前のついたところもありますし、また、北西部には、Agate Fossil Beds Nat'l Monument という公園があり、ここでは、専門家達ばかりでなく、子供達も実際に化石堀りをしているのです。子供のころから、こうした専門的なレベルのことに接するということは、好奇心にあふれる子供たちの学問への道を開くとてもよい刺激になるのではと感じた次第です。そう考えると、ここの博物館の隅に、ちいさな子供達の遊び場があり、ここには、マンモスの化石が床に無造作に置いてあり、子供達をこれに直に手をふれて、化石というもの自体の感触を体験できるようになっているのがうなずけます。こうした、本物に直に自分の手でさわる、それを身近に感ずる、興味が湧くように展示を工夫しているのは、アメリカのどこの博物館でも体験することができます。

Organ Pipe Cactus Nat'l Monument.は、アリゾナのメキシコとの国境にある公園です。

如何にも、ここが西部だと感じさせてくれる、Organ Pipe Cactus とは違いますが、あの柱が立ったようなサボテンが林立している公園です。このサボテンは背の高いものは数メートルにも達するのではないでしょうか。このサボテンは真ん中の支柱となる茎から、丁度、左右に腕が出てきたように二本の枝が出ていて、その姿は丁度そこに人がいるような感じです。あるものは、敬礼をしているような格好をし、また、あるものは駆けっこをしている姿、さらには、サッカーでボールをけっている格好を思い起こされるようなものまでありますが、これが広大な荒野のなかにたっていると、まるで、沢山の人たちがお祭りをしているような錯覚になります。遠くからみて、想像するだけでも、楽しくなります。そんな公園ですから、ここで、キャンプをしたり、サバイバルトレイルなどがとても人気があるようです。ここを訪れたときには、あるご婦人が、ここの係官に、キャンプをするにはどうすればよいのか、子供達はどんな楽しみかたをす

Please Touch Me ！ とある。

ればよいのか、どんなイベントのスケジュールがあるのかなど尋ねていました。その応対するすぐ横には、ここの公園のオリエンテーリングをしているビデオルームがあり、そして、入り口には、この公園に住む野生の動物達の剥製や化石沢山置かれていました。びっくりしたのは、そこに書かれているカンバン。「Don't touch！」 ではなく、なんと、「Please Touch Me！」とあります。これにはびっくり。どこかの国のように、紐をはり「触ってはいけません。」というカンバンがあり、遠くから眺めているだけの展示とは違い、どうすれば子供達がこういう展示物に興味を持つかということが工夫されている。展示物も大事だが、これに触っても、大事に扱うことを覚えるのも一つの教育。ものは考えよう。こんなところにアメリカ人の合理主義があるのでしょう。まことに感心した次第です。

さわってごらんで思い出したのは、Carlspad Caverns Nat'l Pk でのことです。ここは、山の上から、エレベーターで地下、230 メートル以上もぐる。その深さに度肝を抜かれるが、そこにできているこの洞穴がまた、どでかい。これまでも何度か、この類の洞穴を見学したことがあるが、それらはいずれも天井までの高さが数メートル程度のものが多い。中国の本渓の洞穴の時には、確かに、船で見学するなど、そのスケールはなかなかであったが、

見てください。気品を感じさせる Quadalupe

ここの洞穴は、奥行きばかりでなく、洞穴の高さがすごい。三十メートル、いや、なかには、五十メートルくらいあるのかもしれない。この穴の高さが高いということは、そこにできた塔の高さもどでかい。

ここの鍾乳洞がスケールが大きいというのは、どんな表現をすれば適当なのかはよく分からないが、この洞穴の様相は、まさしく、地下帝国という感じ。これだけの大きな空間があれば、どれだけの人間がここで暮らすことができるだろうかなどと思いをめぐらすほど、とにかく、スケールが大きいのだ。

ほんの一角だけを見て切り上げるつもりだったが、自然が何億年もかけて作り上げたその造詣、そこにできた塔の形の不思議な魅力に取り付かれ、ついつい奥へ奥へと足を運んでしまった。

このCavernは、とても長いトレイルがあり、丸一日かけてここに遊びにくる人が沢山いる。ここがとても人気のある場所であるのは、駐車場に止まっていた車の数の多さですぐ分かったが、関心したのは、これほどまでに洞穴を人気のあるものにしている、その背景はなんなのだろうかということ。ここで手に入れた解説書によれば、なんと、ここは、National Parkになってはいるものの、その運営は私的な非営利団体が運営しているとのことである。そして、その目的は、ここを訪れる人たちに、自然のつくりあげたものに対する理解を深めてもらうこと、洞穴だけではなく、動物、植物などについても専門的な解説をし、理解してもらうこととある。こうした努力は、あくまでも、将来、その知識を役立てて、また、自然の保護に携わってくれるような子供を教育するためである、と解説されている。確かに、アメリカのNational ParkやNational Monumentを訪問すると、非常に丁寧な説明がされているし、しかも、それが専門的なものであるにもかかわらず、子供たちにとても分かりやすいような形に工夫されていることに感心する。こういう考えは、何でも商売に結び付けて、金儲けをしようという、どこかのこじき感覚の国の人たちには是非とも、考え直してほしいものである。

まるで地下帝国の神殿を連想させてくれる

ご存知のように、こうした鍾乳洞の石灰石の柱は、一ミリ成長するのに百年、二百年かかる。それだけでも如何に貴重なものかがわかる。その柱は今でも成長しているが、これに人の手がふれると、その石灰石の柱の成長は止まってしまうのだそうだ。だから、こうしだ鍾乳洞では、絶対に手を触れてはならない。それでも、手で触ってみたいのが人情。そうした誘惑にこたえるため、ここのエレベーターの待合所には、大きな石灰石の石が置いてあり、ここに、好きなだけ、気の済むまで触ってくださいと係官が説明する。そのかわり洞窟のなかの本物には絶対に手を触れるなというわけである。これもなかなか粋な計らいでした。

アメリカには、実に沢山のケーブ、鍾乳洞が全国にあります。ケーブからは沢山の珍しい鉱石が発見されることから、産業的にもとても意味のあるものですが、それよりも、鍾乳洞の歴史や、研究の対象としての鉱物は、きわめて貴重なものです。ケーブ学会というのがあり、そこで研究をしている人たちの成果を発表する機関まであります。このように、自然の不思議を一つの学問として作り上げていくところに、本来の学問の姿があるように

思いますがいかがでしょうか。

ナショナルパークのレンジャー

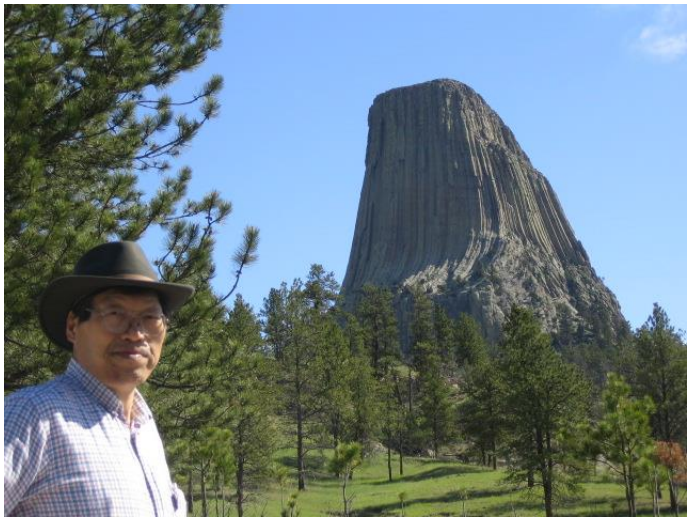
どこのナショナルパークにもレンジャーと呼ばれるガイドがいます。しかし、この人たちは、ただ単なるガイドではなく、そのナショナルパークで自然を研究している学術研究員達です。

ワイオミングの北東のはずれにデビルズ・タワーというナショナル・モニュメントがあります。これは、溶岩が地表にでて、自然の力によりできた岩山なのですが、その形が異様なこと、そして、その岩は縦に何枚もの屏風が寄り添っているような形で空に突き出ているのです。百聞は一見如かずです。写真をご覧下さい。この姿を見れば、これがどうしてできたのか疑問に持たない人はいないはずです。

では、そのデビルズ・タワーに行ったときの感激を紹介します。

デビルズタワーで

しばらく、緑の木々に包まれた高原ドライブに気分を良くして走っていたら、あるところで突然前方の視界のずっと向こうに、なんとあの異様な形をした岩山が姿を現した。こちらは、ほとんど起伏のない地形だから遠くの山もさえぎるものがない。そこに忽然と空に突き出たまるで大地にナイフを突き刺したような岩山は特別よく目立つ。これは紛れもなく、あの宇宙への発信基地といわれるデビルタワーだ。ヤッターッ。ついに実物を見ることができたのだ。しかも、こんな遠方からのすばらしい光景が目の前に広がっているとは。



やがて、遠くの山並みの上に見えていたものは、すぐ自分の目前に見えるところまで来た。もう、さえぎるものは何もない。手を伸ばせば触れるくらいのところにデビルズタワーがあるのだ。とにかくもっと近くに行ってみなくてはと、ふもとの高速道路からさらにすぐ直下のビジターセンターに向かう。今度はあまりに近すぎて、時々は木々の間に隠れてしまうが、タワーを見上げる角度はますます高くなる。今にも、こちらに覆いかぶさってきそうだ。まっすぐ垂直に切り立ったがけ、そのがけには縦に岩が並んでいる。どうしてこんな姿になった

のか、その謎は説明をよむまで分からない。それこそ、自然はどこまでも気侭にこうした造詣を作るのかと驚かざるを得ない。

やがて、タワーの直下にくると、ここから車を降りて、さらに岩山の付け根まで行くことができるようになっている。なかには、この直立の岩山に挑戦する者もいる。それらしきバーティーがザイルを担いで木陰の中に吸い込まれていく。この岩に取り付かれた登山家だろう。良く見ると既に、あの筋を書いたような垂直の岩の直下まで登っているバーティーがいるではないか。したからみんなで指を指して彼らの動きを見守る。さすがに、ごろ岩のところからその上は難所のようで、しきりにコースを見定めているようであった。果たしてあのバーティーにはこれからどんな試練と、それを乗り越えた満足感が待っているのだろうか。そんなことを考え、その出来た謎解きに挑戦しながらこのすばらしい地球の歴史の贈り物を味わった。その出来かたにも信じがたいものがあるが、それよりももっと不思議なことは、このタワーにまつわるインディアンの昔ばなしだ。それは、こんなものだ。

昔、このあたりに住んでいたインディアンに八人の子供が居た。そのうちの七人は娘で、一番下の子供は男の子であった。毎日、みんなで自然の中を駆け回り、動物を追いかけたり、小鳥のさえずりにあわせて歌を歌ったりしながら楽しんで遊んでいたが、ある日突然、その男の子は口が利けなくなり、指の先には鋭く尖った爪が伸び、体中に毛が生えだした。そして、ほかの子供達を追いかけまわし、食い殺そうとした。そこで、女の子たちは必死に逃げ回り、木の上に登り、岩にしがみついてこの化け物のようになってしまった弟から逃れた。そして、最後のこの岩山に上り始めたが、熊になったその子はそれでも食べようと追いかけまわしたそうだ。とうとうこの七人の娘達はこのタワーから降りることができず、天に昇ってしまったそうだ。それがやがて北の空に輝く七つの星となった。これが北斗七星で、その形が熊の形になっているという。インディアンの昔話には、こうして天に突き出たタワーには、熊がすんでいるという話がよくあるそうだ。

それにしても、北斗七星が熊の形をしているこというのは、まさにギリシャ人が作った星座のなかでの北斗七星が子熊座であることと見事に一致している。これは、なんと説明したらよいのだろうか。古代のギリシャ人とアメリカのインディアンとの間に文化のつながりが無かったと誰が断言できるのだろうか。ひょっとしたら、その当時からアメリカインディアンとギリシャ人とは交流があったか、あるいは、宇宙人がきて、同じような話しをその両方に聞かせて上げたのかもしれない。そんな胸がわくわくするような思いをして、その麓から天にまで届くような形でそそり立つデビルズタワーにますます親近感を覚えた次第である。

どうして、こんな岩のタワーができたかって。不思議でしょう。でもそれも長い地球の歴史からすれは、こんなことがほんの一時期の間に出来るのです。つまり、これは昔の火

山の火山口に向かってマグマが上ってきた、その跡なのだそうです。大昔は、まだ、そのマグマは大地の中にあったのですが、アメリカでは大地が雨風により削られてなくなってしまうことがよくあります。だから、マグマの周りにあったやわらかい土だけが流されてしまったというわけです。のこされたのは硬い溶岩だけ。しかも、地中から出てきて、火山になって吹き上げるまでには行かなかった溶岩ですから、縦方向に流れに沿った岩の筋ができているというわけ。その高さといい、この形といいこの説明を聞いて納得です。いかがでしょうか。信じられますか。でも、アメリカの大陸ならこんなこともありなのです。

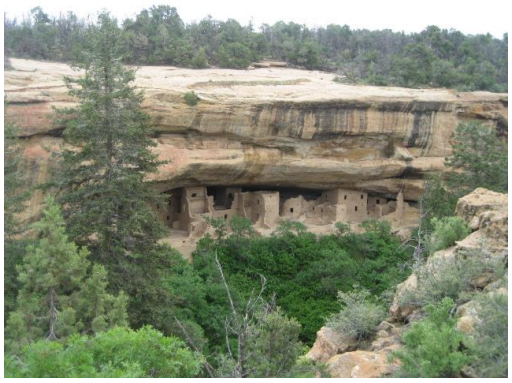
こうした、一見、異様というより、奇怪な形をした自然の造形物のできた由来は、地質学者たちにより、詳しく研究されているのです。ナショナル・パークも研究の対象になっているここだけではありません。どこに言ってもビジターセンターには、学術員がオリエンテーションをしてくれますが、彼らはこうして大学を離れて、一生研究を続けているのです。そして、その卵の若い研究者達が、こうしたところで解説員として勤めているわけです。その成果をパンフレットにまとめ、そして、時には、学術誌に発表したり、本にまとめているというわけです。誰でもが興味を持つこと、不思議に思うことは、まさしく学問の入り口。こうした場所に訪れる子供たちに、専門家が分かりやすく、しかも、真実を説明してくれることは、子供達の好奇心をますます膨らませて、やがては、彼らの後継者となるのではないでしょうか。ジュニア・レンジャーというのが、ここで子供達が合宿をしてレンジャーから自然を楽しみながら訓練をしてもらう制度があります。そのほかにも、たまたま訪れたその日だけ、レンジャーになり、そのナショナル・パークの自然、野生の動物、植物について勉強をし、簡単なレポートにまとめる、大体は簡単なアンケートのようなものですが、これを報告するということをやっています。これに合格すると、その子供には、ジュニア・レンジャーの認定証と、ワッペン、それに、われわれでもほしくなるような素晴らしい記念品がもらえます。そうなると子供達はもう得意満面。こんな風にして子供達の夢が膨らんでいくのをみると、ぜひ、この制度は日本の国立公園などでも取り入れてほしい気がします。

かなり年寄りのパークレンジャーでしたが、愛嬌たっぷり。

メサ・ベルデで見たある家族の話

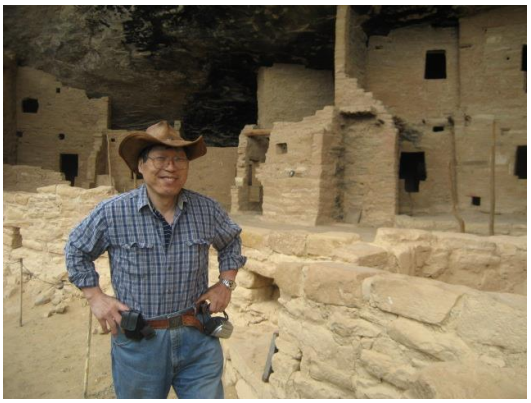
これは、コロラドにあるメサ・ベルデというナショナル・バークでの経験です。このパークは、この辺りに住んでいた先住民族の住居あとですが、そのつくりが異様です。崖の途中にできた洞穴のようなところで生活をしていたのです。そのつくりからかなりの建築の技術を持っていたことは容易に理解できますが、彼らは、ある日、忽然のこの地から姿を消してしまったとのことです。今残っている遺跡には、まるで昨日までここで生活をしていたように後が残っているのです。なぜ、人々はここから姿を消さなければならなかったのか、これが、また、不思議なことです。そのメサ・ベルデでの経験を紀行文から紹介いたします。

この崖の回りを取り巻きながら、どんどん標高を稼ぐ。窓を開けてのドライブは快適そのものだが、すこし肌寒い。寒いわけだ、標高が 2,500 メートルある。途中にある、Over Look からは、下界がまるで別世界という感じで広がっている。この上に古代人が住居を構えていたというわけだ。彼らはどんな思いで、この山の上に住み着いたのだろうか。まだ、この先がどんな具合かは分からなかったが、そのなぞは深まるばかり。



これが Mesa Verde だ

こうして、ほぼ予定通り、ビジターセンターに到着。時間は、八時ちょっと前。このナショナルパークは、いくつもの見学コースがあり、そのほとんどは、レンジャーという人たちが案内をする。とにかくここは、日本で言えば重要文化財のようなものだ。そして、ここに来る人たちは、その専門家の話を楽しみに来ているような人たちばかり。このビジターセンターは、そうした説明のあるツァーのチケットを買うところ。



熱心な人たちが八時前から列を作っている。簡単なミュージアムにもなっているので、ここに立ち寄り見学。私は時間の余裕があまりないということで、個人でするフリーのツァーコースを選んで、そこにいくことにした。その Tree Trail に行くには、まだ数マイルある。これが、アメリカのナショナルパークの規模のすごさだ。ここには、ミュージアムもあるが、まずは、その古代人の住居跡を見学することにした。ところが、これがまた、駐

車場とは崖を挟んで反対側にある。遠くから見学することもできるが、その迫力を感ずるには、この崖を下り向こう側に行かなくてはならない。下ったあとの上りのことが心配であったが、ここまで来て、見ないで帰るわけには行かない。と、思い切って、このトレイルに挑戦。ここにも、レンジャーがちゃんとその場所にいて、質問や、聞きたいことがあれば、事細かに説明をしてくれる。若いお姉さんであったが、なかなか活発で、どっさり資料の入ったダンボールを担いで、この崖を下っていった。その資料とは、この遺跡の説明書きで、かなり事細かな専門的な説明をしてあるもの。こんなパンフレットは彼女達の研究の成果としてまとめたものではないかと思う。

丁度、私と一緒に見学している家族連れがあった。こうしたところに来ている人は、とにかく熱心だ。レンジャーの学術員に、子供が仕切りと質問している。お姉さんがニコニコしながら、懇切丁寧に説明をしている模様。また、一方では、お父さんと子供連れの家族。このお父さんがにわか仕込みの知識を仕切りと披露している。学術員と議論するほど。よこで高校生くらいの子供達が、少し恥ずしいのか、それとも、そんなお父さんを自慢しているのか、その会話に耳を傾けている。親が先生となる。これこそ生きた教育という気がする。こんな家族の姿がなかなかいいね。

お母さんは学術員顔負け

他にも、両親と中学と高校生くらいの二人の子供連れがあった。この家族は、どこに行っても、お母さんが例の解説書を丁寧に読んで、遺跡を指差しながら子供達に聞かせている。横でお父さんも、そのお母さんの迫力のあること、そして、子供達がよく聞いていること。この人たちは、とにかく教育熱心な家族なんだ。

もともとメサベルデには、数千人のインディアンが住んでいたのでは思われている。それにしても、この下界とは全く別の世界に、よくもここに住み着いたものだ。インディアンがこうした高地に住んでいるのは、安全のために下界とは隔絶した土地で生活をする必要があったことなどが考えられる。また、天により近いところでは、祈祷や星占いなどをして生活の様式を築き上げてきたことも考えられる。いずれにしても、ここは、われわれが今築いている生活の基盤となる大地とは、全くの別世界であることに、謎は深まるばかりだ。

ふと、脇を見れば花が咲いていたね。これは高山植物なのだろうか。丁度、つぼみから花が開く間際のもの。なかなか力強さがあってよかった。これを写真に収める。果たして、この写真を誰が楽しんでくれるのかな。そんな思いをしながら、ミュージアムに入る。また、このミュージアムがすごい展示物の数。いずれもここの遺跡から発掘されたものであるが、まことに、こちらのこうした展示物の豊富なこと。これが、まさしく見せかけの文化遺産の研究所でないことを証明してくれているようなものだ。

ここで、並んで展示物を見ていたおじいさんは、一人で見学に来ているようだった。実は、この日、まことに運の良いことにここの遺跡のイベントがあり、この地に住んでいるインディアンがバッファローダンスを披露してくれると、案内をされた。しかし、その場所がよく分からなかったら、このおじいさんが、なら、俺について来いといわんばかりに、丁寧な案内をしてくれた。あまり時間はなかったが、全くの偶然ながら、こんな文化を紹介してくれるのを見ないわけには行かない。少々の時間を使うのは止むを得ないと、そのダンスをするセレモニーの台地まで足を運ぶ。そして、待つこと数分、いよいよ、バッファローダンスの開始。運よくこのイベントを見ることができたのは数十人の訪問客だけであったが、われわれの待ちわびるなか、遠くのほうから、どーん、どーんと太鼓の音を響かせて主役達の登場となった。

バッファローダンスは勇士をたたえる踊りだ

このダンス、男性が三人歌い手として、ドラムをたたきながら、インディアンの伝統の歌を歌う。すると、この歌にあわせて、数人の踊り手の若い女性が独特の飛び跳ねるような仕草のダンスを始めた。その中の二人はバッファローの角突きの面をつけている。顔は全く見えない。そして、その二匹のバッファローの間で、三人の娘さん、色とりどりの民族衣装で小綺麗に着飾っている。原色の色の取り合わせは、実に周りの木々の緑、空に青さ、それに、白い雲の間でよく映えている。この踊り、実は兄弟がバッファロー狩にでかけ、無事に帰ってくることと、沢山の獲物が取れることを祈る、留守の少女達の踊りだそうだ。若い、娘さんが 30 分近く、飛んだり、はねたりしているのだから、これはなかなか大変な踊りだ。とにかく、ここの標高が 2,500 メートルもある。こちらは歩くだけでも息が切れている。

お母さんが熱心に解説書を片手に熱心に説明をしていたあの家族。ほほえましいという

より、こうした遺跡は単なる見学の場所というのではなく、まさしく、自分たちの国・歴史を知る教育の場、そのものであるということを肌で感じました。ツァーに参加すると、丸一日は、ここでいろいろなことを学ぶことができるようになっている。この日、三連休の日でもあることから、実に沢山の人たちが訪れていたが、それぞれがツアーに参加して、専門家の説明を聞き、新しい知識、そして、専門的な知識を身につけて満足していくのであろう。小さな子供達から、高校生くらいまで、ここに来る子供達は、本当に大人顔負けの熱心さで、勉強していくことが分かる。アメリカの学年末の休暇は非常に長いが、こうして、学校を離れて、自分の興味あることを野外で勉強し、それをまとめて報告するなんていうのは、社会で本当に役立つ学問の学び方としてとても有意義ことではないでしょうか。大きな自然を教材にして、本物を感じながら学んでいく、このナショナル・パークのシステムに、どこかの国で、子供達の拘束時間を少なくするためにとやっているゆとりの教育とは違う、オリジナリティとクリエイティブをじっくりと育てていくアメリカの教育のゆとりさえ感じましたがいかがでしょうか。

私もその気になって

うらやましい活躍をしているレンジャーに刺激されて、私のナショナル・パークにまつわる話をひとつ。それは、アメリカのアリゾナ、実は、これはニューメキシコだったのですが、そこには、五角形の砂があるという情報が日本の友人から入りまして、これを見に行くことにしました。しかし、あまり詳しい情報がなく、どうなることかと思いましたが、これも、運よく、たまたま尋ねたところが、この五角形の砂のある、ホワイト・サンズ・ナショナル・パークだったのです。友達から、その砂を持ち帰れという指示でしたが、アメリカのナショナル・パークにあるものは、石ころ一つでも、これを持ち出すと罰金です。さあ、そこで、私はひと思案。そして、その五角形の謎解きに挑戦しました。ナショナル・パークを尋ねる楽しみに、こんなやり方もあることを覚えました。それでは、そのいきさつを紹介いたします。

五角形の砂を求めて　White Sands National Park（New Mexico）

10 号線に入り、Las Cruces に向かう。この辺りのインターステーツもなかなかすばらしい景観。丁度ロッキー山脈が終わりとなるところか。この町、町の名前は、フランス語で

そんな意味を持っているのではないかなと思うようなつづり。交通の要衝として栄えた町なのであろう。町の入り口には、すばらしい、モニュメントが立っていて、通りすがりの人たちが遠くの山々を背景にして記念写真を撮っている。この町からこの日の目的地、White Sands National Monument に行くには、St Agustin Pass という峠を越える。標高が 2000 メートル近くあるが、この峠になんと、ミサイルの模型が立っている。実は、ここは、Military Reservation だったのだ。White Sands Missile Range とあり、not open to public となっている。そのなかに National Monument があるというわけ。しばらくすると、検問があった。これまで、厳しいといわれたメキシコからの検問所も簡単に通過できたので、ここもその程度かと思ったら、これが大間違い。とんでもなく厳しい。アメリカ市民かと聞くから、市民ではなく、住民だといった。ビザで働いていると説明。そしたら、免許証を持っていって、身元を調査するという。こんな調子だから、普通の旅行者など、なかなか立ち入ることができない。それもそのはず、途中に、小型ミサイル基地などと書いた看板が立っていた。しばらくして、係官が出てきて、身元の確認ができたから何とか通ってよろしいということになった。実は、ここに来たのは、日本にいる友人の中塚氏から、「アリゾナに五角形の形をした砂があるそうだ。ただし、そこは、原爆の実験場でもあるので立ち入りが難しいが挑戦する価値はある。」という連絡をいただいていた。その五角形の砂のあり場所が White Sands National Monument かどうかは分からないが、とにかく、ここがアメリカのミサイル基地の中にあることは確か。この砂丘の見事さは、また、格別。なんでこんなところに砂があるのかと不思議に思うが、アメリカ人は、海岸を知るチャンスがないので、もちろん海の砂丘など知らない。そんなこともあり、この砂丘はとても人気があるようだ。しかも、夕日の砂丘がとても素晴らしいということで、私が帰るころになって車の行列ができるほどたくさんの人が見学に来ていた。ここの砂のでき方は、どうも、ドライレイクの砂が風で集まり砂丘を作ったのではと思うが、詳しいことは解説書を見ることにしょう。

これが White Sands だ。

White Sands National Monument の解説書のなかに次のような説明があった。

ここは、250 百万年前には海の底だった。それが、70 百万年前に、ロッキー山脈ができたときにその海の底が隆起した。しかし、その後、隆起したその中央部が 10 百万年前に陥没した。これが、Tularosa Basin となったが、ここの盆地は周りを山で囲まれ、ここにできた湖の水は外にでることができなかった。こうしてここに流れこむ水が、周りの岩山から硫酸カルシウムなどの沢山の鉱物を運び込んだ。そして、水が蒸発するとともにそれが結晶化し、析出したのである。大きなものでは、3 フィートくらいの結晶にもなった。ところが、長い年月の間に、溶解、結晶化、風化、粉砕などを繰り返し、これが、風で運ばれるほどの大きさの砂になり、やがて、いつも一定のほうから吹いてくる風のために湖のある一定の場所に砂山ができた。これが、今の White Sands の砂丘だということである。

舗装しなくてもこの状態。スペースシャトルの着陸訓練場もある。

もちろん、ここの砂は、National Park のものだから、持ち出し厳禁。一粒たりとも持ち帰ってはいけないのです。ただし、学術研究のためなら、少しは許されるだろうと勝手に解釈。中塚氏のために靴のついた砂ということで、数千粒を失敬した。一粒、一ドルとしても、数千ドルか。まあ、いいや。

これは、塩なのか、砂なのか。

そして、五角形の砂の謎解きに挑戦

さて、これまでにして手にしたっ砂ですから、その砂が五角形かどうか、誰でもが確認したくなります。というわけで、私もない知恵を絞り、なんとか、その砂の形をみてみようということになりました。はたして、この砂は五角形だったのでしょうか・。

幸い、200 倍の拡大鏡が手元にありました。これを使い、テレビのディスプレイに画像を映し、さらに、デジカメで写真を撮るというわけである。ディスプレイは、ブラウン管式のものは走査線が入りうまく写真がとれないのですが、LCD タイプのものなら、走査線がないので素人でもきれいな写真が撮ることができます。こうして撮ったのが次の写真というわけです。

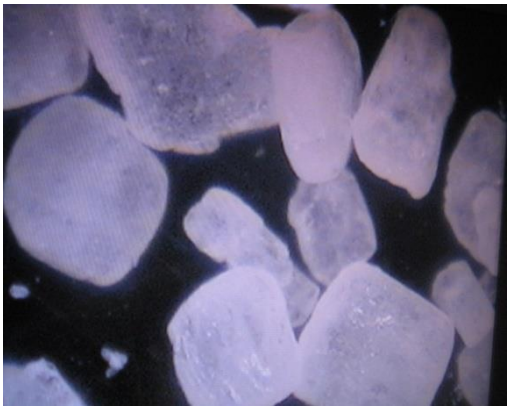


図-1　White Sands の白い砂

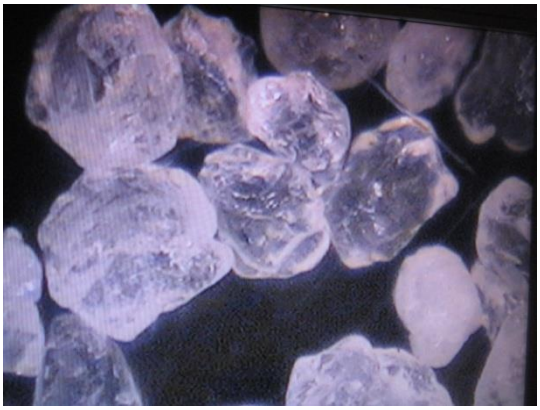


図-2　Florida 東海岸 の白い砂

図-1 が White Sands の白い砂の写真です。これからすれば、この砂が五角形であるとはなかなか言いがたい。ちなみに、Florida の東海岸、ここの砂浜も真っ白という感じ。アメリカのフロリダ半島、とりわけ、キーウェストに向けて沢山の橋が架かっていますが、この橋がまた実に見事に白いのです。この白さは、たぶんここの海の砂を使っているのではとそのときに推定した。とにかく、海岸の砂は真っ白。なぜ白いのかと考えた結果がここの砂は貝殻が砕けてできているのであろうということになりました。川が山から運んできた岩が砕かれて砂になったにしては、山はないし、白いのは、貝殻くらいしかないのです。そこで、その砂の写真を撮ったところ、やはりこれも同じような形をしていました。これらは、もともと大きな結晶化したものが、波に現れたり、あるいは風で流されている間に角がとれて、こんな形になったのでは考えたのです。ちなみに、White Sands は、硫酸カルシウムであるのに対し、貝殻は主として、炭酸カルシウムです。

こうしてみると White Sands の砂が特別な形状をしているとは言いがたい。そこで、この単純な硫酸カルシウムが五角形の結晶になるかどうか、あるいは、何かの条件でそん

なものができる可能性があるかどうかについて見当した。

図-3　再結晶させるとこんな形になりました

そこで、まず、再結晶をさせてみたらどうなるか

あるいは、原爆の実験のために、ある場所の砂だけ水和物の水が飛んでしまったらどうなるか、

などを想定して、次のような経路で、この砂を処理し、その写真を撮った。

ちなみに再結晶は、蒸留水を使った。また、加熱は、お皿の中に液を入れて、電子レンジを使い、注意深く徐々に水を蒸発させた。

もともとが化学を勉強していましたから、これは私にとってはまさしく、化学実験のようなもの、もう、むねがわくわくする様な謎解きになりました。楽しい限りです。

途中の過程は、くどくなりますので省略しますが、なにやかやとこの砂をいじりまわし、最後に、再結晶したときのろ液をさらに濃縮し、結晶化させたものが、図―3 の写真です。つまり、水に溶けているものを濃縮して結晶化させるとこのようなものになるというわけです。ここからは、私の推定になりますが、

もともと何万年もの時間をかけて、大きく成長した針状結晶が、風化すれば、White Sands の砂のように丸く角のとれたものになるだろうが、何らかの原因で湖の水が急激に蒸発したときには、こんな形の結晶構造をした砂ができるのではないかと考えられるわけです。

もともとここが、原爆の実験場であったということから、なんらかの原因を原爆実験と想定していることは、皆さんには直ぐ想像がつくものと思います。

以上が、五角形の砂を求めて、解析を試みた実験結果です。

会社から帰り、道具も、試料もないなかで、身の回りにあるものを精一杯利用して検討した結果ですので、不満足なところもあるかとは思いますが、老人の戯言と思ってご容赦死ください。

素人にも、こんな気持ちにさせてくれるのが、アメリカのナショナル・パークの魅力です。もう、老人ボケの始まっている私にでさえ、こんな気持ちにさせてくれるのですから、好奇心の旺盛な子供達なら、もっともっと熱心に、自分も是非というような気持ちになるのではないでしょうか。

アメリカのナショナル・パークには、どこに行ってもこんな気持ちにさせてくれる何かがあります。それを発見するのは、旅の醍醐味でもありますし、また、この年にして、ますます好奇心が旺盛になる幸せを感じさせてくれます。自然の大きさ、そして、その歴史、本物の展示物など、様々な要因があると思いますが、私にとっての一番の魅力は、やはり、そこが学問・研究の対象となっている教材の場所だということです。ひょっとしたら、専門家でも分からないようなことが発見できるかも知れないなんていう、やましい思いがないわけでもありませんが、そんなことを大海の一滴の水のごとき些細なこと、それよりもずっと大きな自然と対峙できること、何万年、何億年という地球の歴史を目の当たりにみることができること、その素晴らしさを感じてきました。

そんなナショナル・パークの維持にアメリカ政府は、非常な努力を払っています。その一つが、どこのナショナル・パークにもガイドブックが整備されていることです。ナショナルパークの歴史、そして、地理学上の意味、野生動物や植物の生態のが事細かに紹介されています。このガイドブックは無料なのですが、なかなか読み応えのあるもので、詳しく読んでいくとかなりの知識を得ることができます。しかも、専門的なものですから、これは、すこし自慢になるというわけです。こんなふうに興味をもってナショナルパークを回っていると、その土地の自然、あるいは、地学的な歴史、そのスパンは、何万年、何億年ですから、こういう議論をしていると、とても気持ちが雄大になりますし、考え方が大きくなっていくのではないでしょうか。

もう一つのガイドブックは、これはビジターセンターで販売されているもので、10 ドル前後ですが、これは、そのナショナルパークに関する総合的な解説をしています。それまで、学術員が自然の中にはいり研究してきたものを分かりやすくまとめたという感じのもので、地理、地質、植物、動物、鉱物などの情報がびっしり詰まっています。ナショナルパークごとのものですから、かなり詳しい解説ということです。これが、英語ばかりでなく、ドイツ語、スペイン語のものもありますから、よくできています。そして、もう一つ、リアルで最新の情報は、、公園の入り口の料金所でもらう、公園の最新ニュースを紹介した新聞。これだけのガイドブック、資料を手に入れると、かなりの知識が身につくというわけです。もう、ひとかどのパーク通になった気持ちになります。

ちなみに、このナショナル・パークの入場料は、車一台につき、20 ドル前後。同乗者三人までは、一人でも、二人でも同じ料金です。これは、丁度、駐車場の料金を払っているようなものです。そして、粋な計らいは、ナショナル・パーク・パスという、一年間(正確には、翌年の同月までです。うまく使えば、13 ヶ月使えるというわけです。)、どこのナ

ショナル・パーク、モニュメント、ヒストリックサイトでも使えるなカードが 80 ドルで手に入ることです。私もこれを大いに利用させてもらいましたが、このカードを持っていると、四人でパークに行っても、料金は車一台分で済みます。また、これをもっていると、一応は、マニアということで、どこのビジターセンターに行っても、特に親切な対応をしてくれるようです。一度、こんな話がありました。

ノース・ダコタに、ルーズベルト・ナショナル・パークというのがあります。これはここでの話し。まずは、このルーズベルト・ナショナル・パークについて紹介しましょう。

サウス・ダコタからノース・ダコタに入り、すぐに I-94 が走っている。すぐといっても 1 時間以上走る距離、60 マイルくらいはあるが、ここでガソリンを無事補給。このあたりからいよいよ目的のルーズベルト・ナショナルパークとなる。このナショナルパークは南と北に二つに分かれている。どちらにも行きたい気持ちは山々であるが、両方をさっとみるよりも、片方をじっくり見るつもりで、今回は北のパークに行くことにした。こうして、ここからさらにおよそ 1 時間ドライブ。前方に崖の見える地域に到着。回りにあの強烈な断層をあらわにした崖が姿を見せる。地層の作る縞模様は、何重にも、何重にも重なり、その姿は、まさしくこの地球の創製時代からの有様を物語っているようである。ところが、ところが、これは、まだ、ほんの一部。ここから十数 mile もこの地層の絵模様をした地形が続いているのである。まさしく、ここは、バットランドの兄貴分という感じ。ここがルーズベルト・ナショナル・パーク。高速道路から脇に広がるこの公園　広さ、東西に 12 ｷﾛ、南北に 10 ｷﾛほどある。この中に自然を満喫しながらのドライブコースがあり、片道 15 マイル。これが、北のパーク。そして、ここより南に 100mile くらい離れたところに同じくらいの広さの公園がある。とにかく、その広大さにはあきれる。なぜ、ここがかの有名なルーズベルトの名前がついているかといえば、実は、その説明はルーズベルト自信の言葉を参照にした方が理解しやすいだろう。彼は、”I never would have been President, if it had not been for my experiences in North Dakota.”と言っている。その彼は、大統領の在任中にアメリカ大陸のいたるところに国立公園を、そして、自然保護地域を指定してゆき、自然の保護と動物の保護に注力したのである。アメリカに自然が何時までも残っているのは、まさに彼の功績と言っても過言ではないような気がする。彼は大統領になる前に西部に狩に来て、ニューヨークに帰る前にバットランドに寄った。それは、1883 年の 9 月のこと。その翌年、

彼は、ここに仲間と牧場を開き、大自然のなかで狩猟を楽しみながら、精神の安らぎを覚えた。ところが、あるとき、昨年までいたバイソンの大群が突然姿を消してしまったのである。これは、ダコタにあった自然がなくなりつつあることを意味していると知ったかれは、その原因が狩猟にあると心に痛みを感じたのである。こうして、彼は、1901 年に大統領になると、今度は、自然の保護に注力し、1906 年には、18 もの National Monument を含む自然保護林の設定をした。こうしたルーズベルトの業績を記念して、彼が最初に自然と接したここノースダコタの自然公園を彼の名にちなんで、「ルーズベルト国立公園」としたというわけ。ちなみに、大恐慌で有名なフランクリン・ルーズベルトは彼の従兄弟にあたる。

ここのビジターセンターで、ノースダコタの自然を紹介した「North Dakota Wildlife Portfolio」という本と、Lewis と Clark の探検隊が発見した、アメリカ西部の植物図鑑、それに、National Geographic Park Profiles の 「アメリカの秘境」という本を記念に購入した。どこのビジターセンターにも、自然を本格的に研究している来客が沢山いる、というより、こんな僻地まで訪れる人は、よほど自然に興味がある人なので、そうした人を対象にした本がずらりと並んでいるのが普通。というわけで、私ものちのち勉強してみようと購入したわけだが、このナショナルパークでガイドをしている専門家のバーク・レンジャーが、「外国人で、ナショナルパークパスを使い、こんなに沢山本を一度に買うのは、よほど変わり者だ」と思ったのだろう、びっくりして、急に愛想よくなり、これからいくナショナルパークの楽しみ方をいろいろ教示してくれた。この広い国立公園に来ているのは、この日、数台の車しかないのであるから、彼らにとっては、貴重なお客様なのである。このナショナル公園、バットランドと同じように車で、奥に奥にと進んでゆくと、あるときは、渓谷の中を、そして、そこから坂道を上がると、今度は、山の上の台地に着く。そして、そこがこれまたどこまでも広がる大平原になっているのである。一体、どちらが我々の生活している大地なのか、まるで分らなくなってしまう。チョッとだけ紅葉した木々の間に、どこまでも続く自然の造詣の崖を楽しみ、このナショナル公園を後にした。

ミュージアムでの出来事

ナショナルパークだけでなく、アメリカの地方のちょっとした町にいくと、必ずミュージアムがある。もちろん、有名なものは、シカゴ、カンザス、そして、デンバーなどに行けば、これは立派な博物館がありますが、地方の田舎町にも結構立派な博物館があり、これを尋ね楽しむのに事欠かきません。展示の内容は西部開拓の歴史を紹介したもの、インディアンの文化を紹介したもの、そして、その土地の産業博物館など、その内容は様々だが、どこにも共通していえるのが、展示の内容がとにかく豊富なこと。ネブラスカにもリンカーンの郊外に、西部開拓の土台の入植者の生活を紹介したナショナル・ミュージアムがあ

る。ここは、リンカーン大統領がこの西部にフロンティアとして入植した人々の苦労の歴史を残そうとして指定した当時の家を中心とした博物館。そして、ワイオミングのシャイアンには、ゴールドラッシュで太平洋を目指した人々の歴史のあとを辿る立派な博物館があります。カンザスの Newton にある Kaufman Mus.は、ノースダコタで高校の先生をしていた人が寄贈した博物館。その先生が一生掛けて収集した、アメリカ中西部の歴史、動物、植物を紹介したもの。その数ばかりでなく、学術的な意味が深く、これを先生は、ここの大学に寄付したのだ。個人の財産にしておくにはあまりにも重要すぎたというわけです。全く無名の博物館もすごいものがあります。カンザスの Belleville にあるリパブリックという郡の博物館。ここには、西部開拓のために使われた道具が何でもそろっています。ここは田舎の博物館だから、ボランティアの方が管理しているだけだが、われわれが日本から来ている企業の技術屋だと自己紹介したら、特別の展示室を開いてくれました。なんとそこには、二十万点もの小道具、生活用具、そして、農具などが展示されていました。圧巻なのは、こちらでは、牧場には、その牧場独自の鉄条網を張り巡らします。この鉄条網のサンプルが何百種類、否、それ以上かも知れない。びっしりと展示されていました。こうした博物館を見付けながら、アメリカの開拓の歴史を辿るのはとても感慨深いものがあります。西部開拓の歴史を紹介する博物館だけではありません。インディアンの文化を紹介したものも数多くあります。ノースダコタにあるナイフビレッジは、この辺りで農業を営んでいたインディアンの住居があります。アースロッジと呼ばれる土を使った家です。中西部のインディアンを強制的に移住させた場所は、オクラホマ。ここには、インディアンシティーという町があり、ここは、現在のいたるインディアンの生活の歴史を紹介しています。カンザスのウィチタという町には、中部アメリカに住んでいたインディアン達の博物館があります。ここでインディアン歴史を詳しくしることができます。また、ミズーリ川沿いと、コロンビア川沿いには、ここを旅したルイスとクラークの探検の記録をまとめた博物館が、大小合わせて 200 以上あるといわれています。こうした、博物館を訪ねて感心したのは、レンジャーの滞在しているナショナルミージアムは、展示品の解説と同時に、展示されているもの、道具や植物、動物などですが、これについての説明は、説明文には蓋がしてあり、これが質問形式になっていて、まず、これに応えたあと、正確な説明を読むようになっています。

ナイフビレッジのアースロッジ

これも、少しでも説明を詳しく読んでもらいたいということと、ますます興味を持ってもらいたいということの配慮からなのでしょう。展示物を駆け足で見学するのではなく、そこに書いてある説明をじっくりと読み、正確な理解をしてもらうようにという配慮が伺えて、まことに、その工夫には脱帽した次第です。

これは、予断ですが、デンバーの博物館、そして、ミズーリのマンスフィールドにあるローラ・インガルスの博物館に言ったときのこと。時間が遅くなり、到着したのが閉館の30分前。こちらは、とにかく駆け足でも中を見たいとの思いで、入場料を買いに行ったら、そこの係官、どちらの博物館でも、「ここの博物館を30分で見るのは、無理です。 だから入館してもよいが、料金は要りません。」という。流石に、これには頭の下がる思い。恐れ入りましたの一幕でした。「博物館は金儲けのためにしているのではありません。ここに来て、少しでも知識を増やしたいと思っている人のためです。ですから、今度来るときには、もっと十分な時間をとってきてください。」というわけです。

こんな風に見てみると、アメリカには、子供たちのために身近なところにも沢山の工夫のあることが良くわかります。ちょっとした町には、「こども博物館」と言うのがあります。子供達のために作られた博物館であることは間違いないのですが、ここには、子供達が子供のうちにしかできない感動を得られるような工夫がなされています。手で触れること、肌と肌で動物と意志を通じ合わせること、こんな工夫がされているようです。ヒューストンにあるバタフライ博物館では、温室のなかに入るとそこは、蝶が乱舞しています。訪れた、その日に孵化をするような工夫までされています。蝶は、見物人たちの肩に、腕に、そして、じっとしていれば手のひらにさえ、舞い降りて美しい羽を広げていました。自分の頭にとまった蝶に感激して、大はしゃぎをしながら写真をとっていた子供の姿は、「蝶は、この子に素晴らしいプレゼントをしてあげているな。」と、思わず微笑んでしまいました。この博物館にはいると、蝶の種類を説明したガイド用のシートがあり、そのなかには、羽を広げた蝶の写真が一杯。これを手にしながら、このミュージアムのなかを歩くのですが、このガイド用のシートは、無量の貸し出しです。沢山の子供達がこのシートを片手に館内を歩いているのを見て、なるこど、これは、お金儲けのためにしているのではなく、子供の教育のためにしているのだなと言う気がしました。アメリカのミュージアムの工夫は、大人の感覚ではなく、子供の目線で工夫がされているというのを感じたしだいです。

これは、ネブラスカの州都リンカーンにある子供動物園の話ですが、この動物園は大して大きい動物園ではありませんが、園内の動物に触って、一緒に遊べるというのがうたい文句で、近隣の州からも沢山の子供達が遊びに来ます。大人の感覚からすると、設備も、動物の種類もそろっているオマハの動物園のほうがよほど迫力があるのですが、実は、全米の「行ってみたい動物園」という子供・大人の人気投票では、このリンカーンのふれあい動物園がベスト25の中に選ばれているのです。そこに、動物とのふれあいをとおして子

供の成長を考えているアメリカ人の考え方があるような気がしました。

最後に街中でみかけたとても貴重な経験。ご存知のようにアメリカの本屋さんでは、売り物になっている本を棚から引っ張り出してきて、これを読みながら、そこで調べものをすることができます。学生が図書館代わりに、本屋さんで勉強しているなんて言うのは、どこにでも見られます。もっとびっくりするのは、本屋さんのなかに喫茶コーナーがあり、ここに売り物の本を持ってきて、何時間も読んでいる人さえいます。別に本を買わなくてもかまわないのです。本を読むこと自体が非常に価値のあることと思われているのではないでしょうか。この話は、インディアン州の Evansville の本屋さんでの話しですが、この本屋さんには、子供達のために本の読み聞かせコーナーというのがあり、ここで、若いお姉さんが、集まってきた子供達に、一生懸命絵本の読み聞かせをしていました。子供達はそのお姉さんの熱心な話しぶりと身振り手振りの仕草を、食い入るように見ていました。そのお姉さんの読む声は、もう、ガラガラ声だったのですが、でも、その熱のいれように、子供達はまるで魔法にでもかかっているかのように、身動き一つせず、じっと聞いているのです。彼女は多分、大学の学生ではなかったかと思いますが、こんな風にして子供の教育の実践を勉強しているのではと想像しました。自分の声がガラガラになるほど、このお姉さんを夢中にさせているのは、子供たちのこころであり、それを感じ取り、それをもとに子供たちとの接点を切り開いていこうというこのお姉さんの気持ちにあるのではないでしょうか。これこそ、まさしく、これはこのお姉さんのためになることだなあと感心してしばらく足を止めて見ていた次第です。日本にもこんなゆとりと目的意識のある本屋さんはできないでしょうか。

ナショナルパークの楽しみ方から、街中の本屋さんにまで話が広がってしまいましたが、最後に、アメリカのナショナル・パークの印象をひとこと。それは、「そこは、観光地ではなく、文化遺産」というような場所。だから、そのつもりでここを尋ねることが大事ではないかと思います。自然の大きさ、地形の歴史が全く違いますが、日本の自然もこんな形で自然を守っていく必要があるのではという気がしました

2009/07/01

鈴木　誠二